研究論文

介護学生の連携力向上へのアプローチ
―多職種連携への学びと課題―

福田　洋子
高田短期大学キャリア育成学科

1. はじめに

我が国の超高齢社会での高齢者を取り巻く現状は、要介護高齢者の介護課題、地域・在宅医療への対策、さらに年々増加する医療費の問題など多くの課題を抱えている。

世界保健機関（WHO）[1]は、欧米先進国の高齢化による人口構造や健康問題の変化をうけ2010年に、多職種連携教育と連携実践のための行動枠組みを発表し、世界的に多職種連携を推進することを推奨した。日本も同様に、超高齢社会において多職種連携は必要不可欠なものであることから、多職種連携教育が進められてきた。

多職種連携[2]は、多職種連携（Interprofessional Wark＝IPW）と多職種連携教育（Interprofessional Education＝IPE）[3]に区別され、現在、保健医療福祉系の大学を中心に多職種連携教育への取り組みが進められている。多職種連携は、もともとは保健医療職による連携から始まったが、最近は、高齢者や障害者ケアに関わる介護支援専門員、医師、看護職、介護職、リハビリテーション専門職、医療ソーシャルワーカー、地域包括支援センターや社会福祉機関の職員、介護保健施設の職員、民生委員、ＮＰＯ法人の職員、ボランティア、自治会のメンバーなど様々な人々があげられる。

介護福祉士養成教育では、2009 年から、教育体系が、「介護」「人間と社会」「こころとからだのしくみ」の３領域に分類され教育が進められている。多職種連携は、基礎教育と介護実習において多職種がどのように連携しているのかを学び、就職後の介護実践において活かされる。しかし、学校教育では、多職種連携については学ぶが、学生の連携能力を高める連携教育として体系立てられたものは無く、教員の裁量で連携教育が行われている現状がある。

福田（2015）[4]は、特別養護老人ホームでの看取りの多職種連携の現状を調査した。その結果、「利用者の状況に合わせた明確な目標があるか」で、介護職の52%が「はい」、13%が「いいえ」、30%が「わからない」、5%が「無回答」であり、「多職種連携での分業・分担は明確にされているか」では、介護職の59%が「はい」、10%が「いいえ」、30%が「わからない」、「無回答」１%であった。さらに「多職種連携の研修を受けているか」では、介護職は 47%が「はい」、53%が「いいえ」と答えており、介護施設での多職種連携教育は進んでいない現状を明らかにした。このような現状から、高齢者の尊厳を守り、介護の質を確保するためにも、介護福祉士を目指す学生の、多職種連携教育を体系立てて進めていく必要がある。さらに多職種連携が推進されることで、介護職の離職率の軽減にも繋がるのではないかと考える。2012 年に介護保険法が改正され、2014 年に医療介護総合確保推進法制定[5]によって、地域包括ケアが推進されることになった。この一連の改革のなかで求められてきたのは、利用者へのサービス提供

における多職種連携である。地域包括ケアを推進していくためには、高齢者の健康や生活を支えるための医療と介護の連携が欠かせず、サービス提供にあたり多職種連携を行っていくことが求められている。しかし多職種連携の重要性は理解していても、専門職同士が交流しにくい様々な障壁があることも現状である。多職種連携を実践し、利用者の願いを叶えていくためにも、多職種連携を実践できる人材が求められている。

本研究は、介護福祉士を目指す学生の連携能力を高める視点での講義と演習を実施し、学生の多職種連携への学びから、多職種連携のスキルアップを図るよりよい授業方法を模索するものである。

2. 用語の定義

(1) 多職種連携

質の高いケアを提供するために、異なった専門的背景をもつ専門職が、共有した目標に向けて共に働くこと。

(2) 多職種連携教育

多職種連携教育とは、イギリスの Interprofessional Education(IPE)を訳したもので、日本語では、専門職連携教育と訳されていることが多い。イギリスの IPE 推進団体の定義では、「患者・利用者中心の保健医療、福祉実現のために、学生、教員、実践者がお互いにお互いから学び続けること」という総合的な学習を指している。

本研究では、学生が卒業後に、多職種連携でのケア実践に繋げていけることを目的に、学生時代に学んでいく多職種連携を想定したチームワークスキルアップの教育を多職種連携教育とする。

3. 研究の目的

本研究は、T 短期大学の介護総合演習Ⅲの授業において、チームメンバーを調整できるコミュニケーション能力の向上、各職種の役割やチーム機能の理解など、多職種連携能力向上を目標としたグループワークやケースメソッド、ロールプレイ、ケアカンファレンスの模擬授業から、学生の多職種連携の学びと授業全体を通しての学びの検証をし、今後の連携能力向上に向けた、授業方法を検討する。

4. 研究方法

(1)調査対象

T 短期大学介護福祉コースの 2 年生 17 名の中で、研究に協力を得た学生を対象とした。第 1 回質問紙調査は 16 名から回答を得た。第 2 回の質問紙調査は 15 名から回答を得た。インタビュー調査は 6 名の学生に協力を得た。

(2)調査期間

2015 年 11 月に第 1 回質問紙調査、12 月に第 2 回質問紙調査、2016 年 1 月にインタビュー調査を実施した。

(3)調査方法

調査は、無記名自記式質問紙調査とし、調査期間中に2回行った。第1回は、ターミナル期の多職種チームカンファレンス模擬授業後、その取り組みに対する学びの質問紙調査を行った。第2回は、授業での多職種連携に関する学びに関する質問紙調査を行った。さらに6名にインタビュー調査を行った。

(4)調査内容

第1回質問紙調査は、「ターミナル期の多職種チームカンファレンス模擬授業への取り組み」19項目の質問、第2回の質問紙調査は、「多職種連携の学びに関する」21項目の質問紙調査を行った。インタビュー調査は、「1.実習で連携をするために何が困難だったか、2.多職種連携を行うために学生時代に何を身につけておかなければならないと思うか、何を学んでおきたいか、3.目標や役割意識を持つためにどうしたら良いか」の3項目であった。

(5)分析方法

統計処理は、選択式質問項目は単純集計し、記述式質問項目は記述内容を記載した。インタビュー内容は、回答を精査し記載した。

5.調査結果

(1)第1回調査結果

多職種チームカンファレンス模擬授業への取り組みのアンケートの内容と結果を以下に示す。

表1　問1から問2の質問項目結果

問1	性別	男	女
		5名(31%)	11名(69%)
問2	年齢	19歳	20歳代
		12名(75%)	4名(25%)

表2　問3から問10質問項目と結果

質問項目		1. はい	2. いいえ	無回答
問3	チームにおけるターミナル期カンファレンス模擬授業は学びにつながりましたか	13名(81%)	2名(13%)	1名(6%)
問4	問3で、1. はいと答えた場合、どのような学びにつながりましたか(①～⑧項目で複数回答可)			
	①仕事に生かせる	5名(30%)		
	②いろいろな意見が聞け、他者の考えがわかった	3名(18%)		
	③カンファレンスの方法がわかった	6名(36%)		
	④他職種の役割が理解できた	5名(30%)		
	⑤利用者・家族の気持ちになれた	3名(18%)		
	⑥客観的に他者の意見を分析できた	3名(18%)		
	⑦カンファレンスを通し、自分の意外な一面が発見できた	0名		
	⑧その他	0名		
問5	問3で、2. いいえと答えた場合、理由をお聞かせください	記載者なし		
問6	チームケアカンファレンス模擬授業は必要と考えますか	1. はい	2. いいえ	無回答
		14名(88%)	1名(6%)	1名(6%)
問7	問6で、2. いいえと答えた場合、理由をお聞かせください	記載者なし		
問8	事例は妥当でしたか	1. はい	2. いいえ	無回答
		14名(88%)	0名	2名(12%)
問9	チームケアカンファレンス模擬授業に積極的に参加できましたか	8名(50%)	7名(44%)	1名(6%)
問10	施設におけるターミナルケアに関して	1. 関心が高い	2. どちらともいえない	無回答
		10名(63%)	5名(31%)	1名(6%)

表３　　問 11 から問 15 の質問項目と結果

問11	これまでの人生で誰かの死を看取ったことがありますか	１．ある	２．ない	無回答
		3名（19%）	12名（75%）	1名（6%）
問12	ターミナル期のカンファレンスに参加したことがありますか（実習時）	2名（13%）	13名（81%）	1名（6%）
問13	施設職員からターミナルケアについて説明や指導を受けたことがありますか	1名（6%）	14名（88%）	1名（6%）
問14	ターミナルケアについて説明を受けた時は、どのような気持ちになりましたか（複数回答可）			
	①多くの学びに繋がった	3名（18%）		
	②あまり学びに繋がらなかった	0名		
	③もっと学びたいと思った	1名（6%）		
	④怖くて気分が悪くなった	0名		
	⑤あまり聞きたくなかった	0名		
	⑥説明や指導がわからなかった	0名		
	⑦その他	0名		
問15	家族とターミナル期のケアについて話をしたことがありますか	１．ある	２．ない	
		2名(12%)	14名（88%）	

問 16 チームケアをよりよくしていくための模擬カンファレンス授業について意見やアドバイスをお書きください。

表４　　問 16 の記述内容

・意見を尊重する
・役割を理解する
・専門職について理解を深めてから、カンファレンスに臨む
・意見を出しやすい雰囲気つくりが大切
・利用者本人の意思を一番に叶えられるようにする
・多職種が意見をきちんと述べる

問 17 今後カンファレンスに参加するときに心掛けたいことを書いてください。

表５　　問 17 の記述内容

・もっと意見を出せるようにしたい
・積極的に参加する
・真剣に伝えたい
・家族や利用者の思いを中心にして考えていきたい
・疑問に思ったことはすぐに聞きたい
・メモや記録は細かく具体的に書くようにしたい
・自分の役割を把握して、やらなければならないことを的確に伝える
・相手の意見をしっかり聴く

(2) 第１回調査多職種チームカンファレンス模擬授業への取り組みアンケートの結果の分析と考察

チームカンファレンス模擬授業については、13 名（81%）の学生が学びにつながったと回答し、その学びで最も多かったのは、「カンファレンスの方法がわかった」であった。次に、「他職種の役割がわかった」、「仕事に生かせる」であった。しかし、積極的に参加できたかでは、「はい」８名（50%）、「いいえ」７名（44%）、「無回答」１名（6%）であった。この結果から、学生はカンファレンス参加の機会もなく、カンファレンスの進め方や会議の内容なども理解していなことから、積極的な参加に繋がらなかったのではないかと考えられる。さらに模擬カンファレンスを体験することで、連携よりもカンファレ

ンスの方法に着眼したと考えられる。特にターミナル期のカンファレンス参加は、「ある」が 3 名（19%）、「ない」12 名（75%）、無回答 1 名で計 13 名（81%）であった。これは、福田（2013）[4]の調査結果でも明らかにされたが、看取りカンファレンスは、リーダー、サブリーダーが主に参加し、介護職の多くが看取りカンファレンスへの参加が少ない。つまり学生が就職後も、ターミナル期のカンファレンスに参加する機会は少ないと言える。それは、多職種連携能力を鍛える機会が少なくなると言えるのではないか。しかし施設実習で、ターミナルケアの説明を受けた学生は、多くの学びに繋がったと答えているように、実習施設で指導者から受ける説明は、学校で学ぶターミナルケアより身近に感じ、「もっと学びたい」との学生の意欲に繋がったと考えられる。

多職種チームカンファレンス模擬授業体験後の、チームケアをより良くしていくための学生の意見は、「意見を出しやすい雰囲気をつくる」、「意見をきちんと述べる」、「意見を尊重する」、「利用者本人の意思を一番に叶えられるようにする」、「役割を理解する」であった。これは、福田（2013）[4]の調査でも明らかにされた、特別養護老人ホームの介護職の課題としている意見内容でもある。本調査の結果から、卒業後に、利用者・家族の意向を中心とした多職種連携が行えるようになるには、学生の時に模擬の多職種チームカンファレンス等チームワークを高める授業を多く体験し、個々学生の連携能力を鍛えていくことが必要である。それには、授業での訓練には、十分な時間が必要であることが明らかになった。

(3) 第 2 回調査結果

介護学生の多職種連携の学びに関するアンケートの内容と結果を以下に示す。

表 6　問 1 から問 14 の内容と結果

問1	性別	男	女	
		5名(33%)	10名(67%)	
問2	年齢	19歳	20歳	21歳
		2名(13%)	12名(80%)	1名(7%)

質問項目		1. 理解できた	2. やや理解できた	3. あまり理解できなかった	4. 理解できなかった
問3	介護職の仕事の内容について理解できましたか	4名(27%)	11名(73%)	0名	0名
問4	介護職の専門性について理解できましたか	4名(27%)	11名(73%)	0名	0名
問5	看護職の仕事の内容について理解できましたか	6名(40%)	8名(53%)	1名(7%)	0名
問6	看護職の専門性について理解できましたか	6名(40%)	8名(53%)	1名(7%)	0名
問7	介護支援専門員の仕事の内容について理解できましたか	6名(40%)	8名(53%)	1名(7%)	0名
問8	介護支援専門員の専門性について理解できましたか	4名(27%)	9名(60%)	2名(13%)	0名
問9	生活相談員の仕事の内容について理解できましたか	4名(27%)	10名(67%)	1名(7%)	0名
問10	生活相談員の仕事の専門性について理解できましたか	4名(27%)	10名(67%)	1名(7%)	0名
問11	理学・作業療法士の仕事の内容について理解できましたか	3名(20%)	9名(60%)	3名(20%)	0名
問12	理学・作業療法士の仕事の専門性について理解できましか	4名(27%)	8名(53%)	3名(20%)	0名
問13	栄養士の仕事の内容について理解できましたか	4名(27%)	8名(53%)	3名(20%)	0名
問14	栄養士の仕事の専門性について理解できましたか	4名(27%)	8名(53%)	3名(20%)	0名

問 15 多職種連携を行うために学生時代に学んでおかなければならないことは何だと思いますか具体的に書いてください

表 7　　問 15 の記載内容

・報告、連絡、相談について	・チームで協力する力
・基礎知識	・責任感
・多職種の特徴	・自分の考えをまとめて発言する力
・多職種の役割	・自分で調べる力
・リーダーシップ	

問 16 チームワークを進めるためのグループワーク・ケースメソッド・ロールプレイ・ケアカンファレンス模擬授業で学んだことについてあてはまるもの全てに〇を付けてください（複数回答可）

1. 利用者の立場に立って考える対象者理解を、他の専門職者と共有することを学んだ
2. 利用者中心の共通の支援目標を、他の専門職者と共同して立てることを学んだ
3. 自分自身が学んでいる専門領域の特性を確認することができた
4. 他の専門職の専門性、特性を学ぶことができた
5. お互いの専門領域の共通点を学ぶことができた
6. チームメンバーでは網羅できない支援内容があることを学んだ
7. 異なる専門職の人と共にリーダーシップ、メンバーシップの役割をとることの難しさを学んだ
8. 自分の考えを異なる専門職の相手に理解できるように伝えられる事の難しさを学んだ
9. 異なる専門職のチームメンバーが自分の考えを伝えられるように配慮することを学んだ
10. 異なる専門職の参加するチームにおける、チームワーク技術の重要性、必要性を学んだ
11. 多職種で家族支援をしていくことの重要性、必要性を学んだ
12. 家族や利用者の意向を聞き取り、計画に反映することの難しさを学んだ

表 8　問 16 の結果

設問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
数	6名（42%）	4名（28%）	7名（46%）	8名（56%）	8名（56%）	4名（28%）	3名（21%）	4名（28%）	5名（35%）	5名（35%）	4名（28%）	4名（28%）

問 17 卒業後、あなたが多職種連携をしていくうえで自分自身のことで困難や課題と思うことは何ですか、あてはまるもの全てに〇を付けてください（複数回答可）

表 9　問 17 の質問項目と結果

質問項目	人数	割合
1. 他の専門職とコミュニケーションが取れない	7名	46%
2. リーダーの指示が聴けない	0名	0%
3. 介護・福祉の知識がない	1名	7%
4. 医療知識がない	5名	35%
5. 介護技術力がない	4名	28%
6. 家族と話ができない	0名	0%
7. 利用者とコミュニケーションが取れない	1名	7%
8. 仕事に振り回されそうである	6名	42%
9. 共通の目標がつかめない	4名	28%
10. 自分の役割がわからない	1名	7%
11. チームワークが図れないと思う	1名	7%
12. 報告・連絡・相談ができない	0名	0%
13. メンバーシップが取れない	1名	7%
14. 人に任せられない	0名	0%
15. 自信がない	10名	70%

問 18 介護実習で多職種連携について学べたところは何ですか（複数回答可）

表 10　問 18 の質問項目と結果

質問項目	人数	割合
1. 利用者の立場に立って考える対象理解を、他の専門職者と共有することを学んだ	7名	46%
2. 利用者中心の共通の支援目標を、他の専門職者と共同して実施することを学んだ	5名	35%
3. 自分自身が学んでいる専門領域の特性を確認することができた	5名	35%
4. 他の専門職の専門性、特性を学ぶことができた	5名	35%
5. お互いの専門領域の共通点を学ぶことができた	2名	14%
6. チームメンバーでは実施できない支援できない支援内容があることを学んだ	2名	14%
7. 異なる専門職の人と共にリーダーシップ、メンバーシップの役割をとることの難しさを学んだ	3名	21%
8. 自分の考えを異なる専門職の相手に理解できるように伝える事の難しさを学んだ	4名	28%
9. 異なる専門職のチームメンバーが自分の考えを伝えられるように配慮することを学んだ	2名	14%
10. 異なる専門職のチームにおけるチームワーク技術の重要性、必要性を学んだ	2名	14%
11. 多職種で家族支援をしていくことの重要性、必要性を学んだ	3名	21%
12. 家族や利用者の意向を聞き取り、計画に反映することの難しさを学んだ	2名	14%
13. チームワークが上手くいくように根回しをすることを学んだ	1名	7%
14. 多職種連携をどのようにとっているのかわからなかった	2名	14%

（4）第 2 回調査　介護学生の多職種連携の学びに関するアンケート結果の分析と考察

問 1 から問 14 の結果から、将来の職業として最も理解しなければならない介護職の仕事の内容や専門性を「理解できた」のは、学生 4 名（27%）であった。学生の 11 名（73%）が「やや理解できた」と答えており、授業や 450 時間の実習を経験しても理解しにくいのか、教授法が学生の理解力にあっていないのかは、今後の授業方法の課題となった。

学生は、チームカンファレンス模擬授業で 13 名（81%）が学びにつながったと答えているが、調査の結果から、多職種を十分理解するには、これまで以上に、時間が必要であることが明らかにされた。特に、理学療法士、作業療法士、栄養士の仕事内容や専門性を「あまり理解できなかった」と答えている学生が 3 名（20%）いた。学生は、理学療法士と作業療法士の専門性に基づく役割の違い、栄養士と調理師の違いが分かりにくいのか、授業や介護実習において理解できていないことが明らかになった。多職種連携をするためには、他職種の役割を理解することが重要である。今後は、学生が「あまり理解できなかった」とあげている職種についての仕事内容や役割を、わかりやすく説明し、多職種の専門性の理解を高めていく必要がある。また、チームカンファレンス模擬授業やグループワークでは、司会者、記録者、発表者の役割をつけ、皆が役割を経験できるようにしたが、消極的な学生は、役割を与えられることから逃げる姿勢が見られた。つまり、役割を何回も経験した学生は、徐々に慣れてスキルアップに繋がっていくが、経験をしない学生は、スキルアップに繋がりにくい。今後は、消極的な学生のスキルアップに繋がる授業方法を工夫する必要がある。

学生は、チームカンファレンス模擬授業やグループワーク、ケースメソッド、ロールプレイなどから、「利用者の立場に立って考えること」、「他の専門職者と共有すること」を学び、多職種連携の必要性は理解したが、個々学生の連携力の向上にはいたらなかった。これは、問 17 の質問項目が複数回答可であるにもかかわらず、項目の多くに〇を付けた学生が少なかったことからも伺える。さらに、「自信がないと」10 名が答えており、多職種連携をしていくうえでの自信のなさが浮き彫りにされた。学生の中には、「他の専門職とコミュニケーションが取れない」と 7 名が答えていることから、卒業後、他職種との報

告・連絡・相談に支障をきたすことが予測される。さらに、6 名が「仕事に振り回されそうだ」と答え、「知識・技術力不足」も相まって、「自信が持てない」要因に繋がっているのではないかと考える。グループワークの効果は、学生の知識レベル、学習意欲、性格、友達関係や、その時の学生の心のあり方でも、大きく関わってくることから、学生の状況に会ったグループの編成など今後の課題としたい。

介護施設での多職種連携が進められてきて久しいが、本調査では、連携能力を育む教育体制の脆弱さから、介護福祉士を目指す学生の、多職種連携能力の向上に結びついていない状況が確認された。ケアの目標や役割も理解しにくい現状から、連携能力の高い職員になるための教育訓練が、卒業後も必要であると考える。卒業後に多職連携での質の高い介護ができるよう、短い 2 年間の学生時代から、様々な機会を通じ、連携教育を行っていくことが重要であることを確認した。

(5) インタビューの結果

1. 実習で連携をするために何が困難だったかの記述内容

・年上の職員にも積極的に話しかけること
・挨拶をすること
・職員と積極的に関われなかったことから、情報収集ができなかった
・報告・連絡・相談ができなかった
・具体的に伝えることが苦手だった
・情報収集する力と発信力が足りなかった
・同級生でも協力することが難しかった

2. 多職種連携を行うために学生時代に何を身に着けなければならないと思うか、
また何を学んでおきたいかの記述内容

・リーダーシップを学んで、自分から動ける力を身につけること
・目上の人とのコミュニケーションや敬語の使い方を学んでおきたい
・多職種と関わる機会が少なく、自分から積極性を身に着け関わらないといけない
・連携を取るために報告・連絡・相談ができること
・具体的に自分の意見を伝えるということを学んでおきたかった
・看護士など医療チーム、理学療法士の仕事を理解しておくこと

3.目標や役割意識を持つためにどうしたら良いか、どのような体験が必要かの記述内容

・学校の行事を通し、自分から進んでリーダーとなり学んでいく
・ボランティアに行って、様々な人と関わりを持ち、コミュニケーションをとることを学んでいくこと、さらに活動を通し、幅広い視野を持つことが必要
・利用者と関わりを持っていくために、レクリエーションなどの活動体験が必要である
・介護について深く知る必要がある
・利用者と関わる時間がもっと必要である

(6) インタビューの結果分析と考察

インタビューは、6 名の学生に行ったが、学生のほとんどが、コミュニケーション能力の課題を抱えており、そのためにコミュニケーション能力を高める必要があると語っている。さらに積極的に職員との関係性を築いていくことができないことから、積極性を身に付ける必要性を語っていた。また自分の意思を具体的に伝える事など、他者との関係性を築いて行くための能力強化の必要性を語っている。そ

の為に、ボランティア参加やレクリエーション活動への参加を行い、様々な人との交流から自分の能力向上を図る必要性も自覚していた。活動への参加は、高齢者や障害者理解にもつながると語っていた。しかし、積極性のなさや、日本語を上手に使えないことは、すぐに能力が向上するわけではないので、卒業後の課題ともなる。今後は、学生の現状から、2 年間で、利用者理解と共に、専門職種理解を授業で深めていくことが必要である。学生は、ともすれば介護技術ばかりに目を向けがちであるが、卒業後、多職種連携をしていくために、多職種とのコミュニケーションを図るための基本としての、挨拶、敬語の使い方、専門用語や医学知識などの専門職者としての能力向上が、これまで以上に必要であると考える。さらに、協働的な学習の中で、リーダーシップが取れる能力を育成していく必要があると考える。その為に、学校教育と施設実習を通して、専門職種の仕事内容を理解するために、学生自身が、専門職種にインタビューをする経験をし、理解を深めることも必要かと考える。

(7) 今後の課題

介護学生の連携能力の向上を目的に、授業で模擬カンファレンス、グループワーク、ロールプレイ、ケースメソッドなどの工夫をしてきたが、学生の連携能力向上までは至らなかった。介護実習においても、カンファレンスに参加したことがない学生が多く、カンファレンスの内容も理解できていない状況が明らかにされた。DVD を使用し、多職種でのカンファレンス状況を、視覚的に学ぶ授業も実施したが、専門職の仕事の内容や役割が理解できていないためか、積極的に学ぼうとする意欲のない学生が目立った。学生は授業を通し、カンファレンスの方法や多職種と情報共有をし、意見交換する訓練を行ったが、自分の意見を積極的に言えない学生の、他者と連携する困難さが明らかにされた。今後は、本調査の結果を踏まえ、学生の連携能力の評価として単元ごとに、①IPE に対する学習者の反応、②態度・認識の変化・③知識・スキルの変化、④行動の変化をチェックし、学生の学習状況を確認していく必要がある。

6. おわりに

本調査は、超高齢社会が抱える多くの課題を、多職種が連携して乗り切っていくために、保健医療福祉系の大学を中心に進められている多職種連携教育に鑑み、介護福祉士を目指す学生の連携力をつける目的で授業を展開し、学生の授業での学びを調査した。その結果、介護学生は多職種連携の重要性は理解しているも、自分自身の課題として、「医療知識や介護技術がない」こと、「多職種と話ができない」、「共通の目標がつかめない」、さらに「自信が持てない」などの現状が明らかにされた。なかでも、利用者とコミュニケーションが取れない学生もいることから、入学時からコミュニケーション能力の向上を図る訓練が重要となる。

小林ら (2012) [6] の先行研究文献調査では、連携教育は、様々な医療系の専門職を目指す学生が複数の組み合わせによって選定され、協働する形態で実践している。しかし、福祉職者、特に介護福祉士とのコラボレーションが、大学教育において実践されていない可能性を明らかにしている報告をしている。今後は、専門職者との連携ができる能力向上を目指し、多職種連携教育を実践している大学の動向を確認しつつ、本学の介護学生の能力に合わせた連携教育の授業展開を工夫していく必要があると考える。

多職種連携教育を通し、個々学生が自分の力を発揮できる力をつけていくことが重要である。加えて、介護福祉系教員の、多職種連携教育に関わる教育の強化が、必要であるのではないかと考える。

【注】

1. 三重大学「専門職種連携教育および連携医療のための行動枠組み」2010　WHO「World　Health Organization2010 の日本語版翻訳」
2. 松岡千代「多職種連携の新時代に向けて：実践・研究・教育の展望」2013　リハビリテーション連携科学、14 (2)、181-194
名城大学薬学部ホームページ「名城大学 IPE」
3. 朝比奈真由美「自己主導型学習を推進する専門連携教育」2013　平成 25 年度文部科学省・先導的大学改革推進委託事業医療提供体制見直しに対する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方に関する調査研究　医学・看護学・歯学チーム合同シンポジウム
4. 福田洋子「特別養護老人ホームでの看取りケアに関する研究－多職種連携・協働の現状と課題－」2015 日本福祉大学大学院　社会福祉学研究科　修士論文
5. 厚生労働省「医療介護総合確保推進法等について」2014　全国介護（平成 26 年 7 月 28 日）資料
6. 小林紀明、黒石恵子、鈴木幸恵、大宮裕子、堤千鶴子「日本の保健医療福祉系大学におけるインタープロフェッショナル教育 (Inter-Professional Education) の動向」2012 目白大学　健康科学研究　第 5 号　　85-92
7. 袖山悦子、志田久美子、山本迪子、近藤浩子「高齢者支援における多職種連携の効果」2010　新潟医療福祉学会誌、10 (2) 24・30
8. 山本武志、苗代康可、白鳥正典、相馬仁「大学入学早期からの多職種連携教育（ＩＰＥ）の評価－地域基盤型医療実習の効果について－」2013　京都大学高等教育研究第 19 号
9. 平野聖、竹田恵子、大田晋、種村純、進藤貴子、直島克樹、森繁樹「医療福祉における多職種連携のあり方に関する研究」2015　川崎医療福祉学会　Vol.24　No.2　209-220
10. 上山崎悦代、篠田美智子「終末期ケアを中心とした多職種連携に関する教育・研修の現状と課題」2014 日本福祉大学社会福祉学部　日本福祉大学社会福祉論集　第 131 号
11. 大塚眞理子「看護学から見た多職種連携教育」2013　平成 25 年度文部科学省・先導的大学改革推進委託事業医療提供体制見直しに対する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方に関する調査研究　医学・看護学・歯学チーム合同シンポジウム
12. 菊池和則「多職種チームの構造と機能－多職種チーム研究の基本的枠組み」2000　社会福祉学、4 (1)、13-25,
13. 野中猛「多職種連携の技術（アート）－地域生活支援のための理論と実践－」2014　野中ケアマネジメント研究会
14. 長田律子「福祉医療系専門学校における多職種間の連携教育に関する研究－福祉と医療の連携教育を受けた卒業生への調査を通して－」2015　日本福祉大学大学院　社会福祉学研究科　修士論文